

学生相談室の利用状況とその特徴

高橋 洋一*, 田口 淳**

The Usage of Student Counseling Institution and its Characteristics

Yoichi TAKAHASHI and Jun TAGUCHI

Abstract

The purpose of this paper is to develop a consultation system for a student counseling institution at Kagawa National College of Technology. The data of cases handled by the institution from 2009 to 2011 was obtained. The average number of cases in this three-year period was approximately 320. The consultants had been approached by many female as well as advanced course students. Consultation was most frequently sought for college academics, followed by career plans, college life, and personal relationships. Among the lower-grade students, both males and females approached the institution for consultation regarding college academics. Furthermore, the upper-grade students sought consultation mainly for their career plans.

Keywords: Student Counseling Institution, Student Counseling System

1. はじめに

本校高松キャンパスでは、学生の個人的悩みや相談に応じる部所として、旧高松高専時代の1978年に教育相談室が設置されている。それ以来、学生の様々な悩みや相談事について、室員及び外部カウンセラーで対応してきた。その対応件数は、1980年代では年間50件程度であったのに対し、1990年代後半から年々件数が増加しており、現在では年間数百件を越える相談を受けている。また、学生からの相談内容は、非常に複雑かつ多様化しており、対応に苦慮する案件も多い。これまでに出版^{1)~3)}によって、その一部が報告されている。一方、疫学調査^{4)~6)}によると、これまでに不眠や不安などの精神疾患に罹ったことがある割合を示す生涯有病率は、うつ病で6.7%、

気分障害では、14.1%とされている。また、生涯何らかの精神疾患を発症する割合を示す生涯発症率は、15%以上であると報告されている⁷⁾。これらの調査から分かるように、発症頻度が高く、身近にありふれた病気であることに加え、悩みを相談することに対する敷居が低くなっていることが近年の相談件数の増加に繋がっているものと推察される。

2009年10月1日に香川高等専門学校が発足されたことに伴い、教育相談室は、名称が学生相談室に変更された。そこで、本報では、学生相談室の相談体制をさらに充実させることを目的とし、高松キャンパスにおける2009年4月から2012年3月までの3年間の利用状況をまとめ、その特徴を明らかにしたので報告する。

2. 学生相談室の体制

学生相談室は、学生や保護者等からの個人的問

*香川高等専門学校 機械工学科

**香川高等専門学校 一般教育科

題について相談に応じ、その解決のために適切な指導・助言を行い、学生の勉学条件の維持向上を図ることを目的としている。学生相談室は、室長1名、室員6名、看護師1名、臨床心理士の資格を有する非常勤外部カウンセラー1名の計9名で構成されている。室員6名の内訳は、一般教育科から2名、各専門学科から1名となっている。外部カウンセラーは、原則月2回程度、放課後に勤務している。室長および室員は、輪番で毎週金曜日の放課後に学生相談室に詰めて、学生からの相談を受け付けている。また、これらの時間以外にも室長および室員の研究室等で随時相談を受け付けており、多くの学生が各研究室を訪問している。

3. 方法

学生相談室の利用状況をまとめるにあたり、これまでに集計してきた相談件数のうち、2009年4月から2012年3月までに対応する2009年度から2011年度までの集計データを使用した。相談件数は、相談者を低学年(1~3年生)男子学生、高学年(4,5年生)男子学生、低学年(1~3年生)女子学生、高学年(4,5年生)女子学生、専攻科生、保護者、教職員、その他の8つに分類して集計を行っている。その他の相談者とは、卒業生や退学した学生等である。また、相談内容は、学生生活、学業、対人関係、健康、進路、家庭、その他の7つに分類している。

4. 結果および考察

図1に2009年度から2011年度までの3年間の年間相談件数の推移を示す。2009年度および2010年度は、年間250件程度の相談件数であるのに対し、2011年度は440件程度まで増加している。3年間の平均は、約320件であり、多くの学生が学生相談室を利用していることが分かる。そこで、相談件数の詳細を把握するために、相談者別件数、相談内容別件数にまとめた。

図2に3年間の相談者別件数、図3に相談内容

別件数の推移をそれぞれ示す。図2に示す相談者別件数は、男子学生が学年を問わず多くなっており、次いで女子学生、専攻科生、保護者の順番となっている。3年間の平均は、男子学生約100件、女子学生約40件、専攻科生約40件となっている。高松キャンパス本科の総学生数は、約800人であり、その中の約10%弱が女子学生である。また、専攻科の総学生数は、約60人であり、女子学生の割合は、約2%と非常に少ない。学生1人が1件の相談を行ったと仮定した場合、1年間で本科全体の約13%の男子学生が学生相談室を利用し

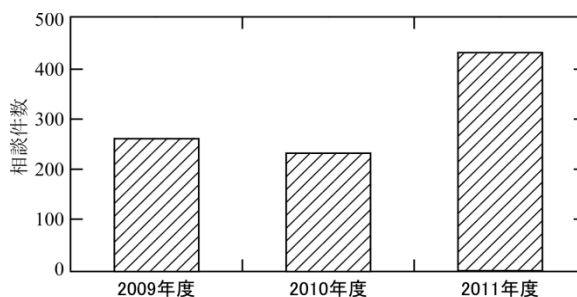


図1 年間の相談件数の推移

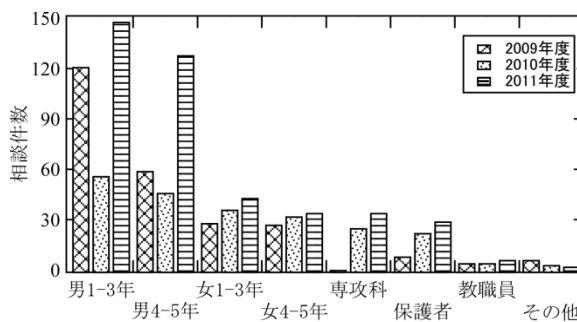


図2 相談者別件数の推移

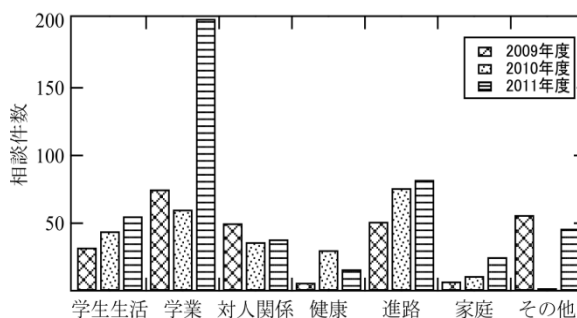


図3 相談内容別件数の推移

たことになる。一方、女子学生のその割合は、約50%であり、女子学生の利用率は非常に高いことが分かる。また、専攻科生も同様に利用率が高い傾向にある。すなわち、女子学生、専攻科生は、学生相談室を利用し易い環境にあることが分かる。図3に示した相談内容別件数を見ると、学業に関する相談が最も多く、次いで進路、学生生活、対人関係の順番で件数が多くなっている。3年間の平均は、学業約120件、進路約60件、学生生活および対人関係で約40件となっている。次に相談者別の相談内容を詳細に把握するために、低学年男子、高学年男子、低学年女子、高学年女子、専攻科生、保護者ごとに相談件数をまとめた。

図4に低学年男子、図5に高学年男子の相談内容別件数の推移を示す。図4に示すように低学年男子では、学業に関する相談が最も多く、3年間の平均件数は、約50件である。次いで進路および学生生活の順番となっており、対人関係、家庭に関する相談は少ない。一方、図5に示した高学年男子では、2011年度に学業の相談が67件と最も多くなっているものの、平均的に進路に関する相談が多い。また、低学年に比べて学生生活に関する相談が少なく、高学年では、日々の学校生活にある程度満足している学生が多いものと考えられる。

図6に低学年女子、図7に高学年女子の相談内容別件数の推移を示す。図6に示すように低学年女子では、学業、対人関係および学生生活に関する相談が比較的多く、進路に関する相談はやや少ない。一方、図7に示した高学年女子では、健康を除いたいずれの相談内容も多く、特に高学年男子と同様に進路に関する相談が多い。男子、女子ともに低学年では、学業に関する相談が多く、高学年になると、加えて進路に関する相談が増えるのが特徴である。また、男子では、学年を問わず、対人関係の相談が比較的少ないのに対し、女子では、いずれの学年も多い。男子学生の数が圧倒的に多い環境の中、女子学生は、男子学生への対人関係だけでなく、女子学生同士の対人関係に悩ん

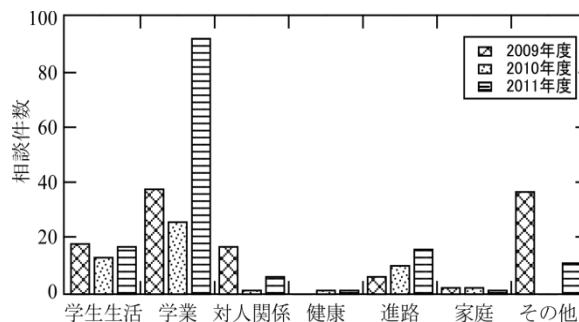


図4 低学年男子の相談内容別件数の推移

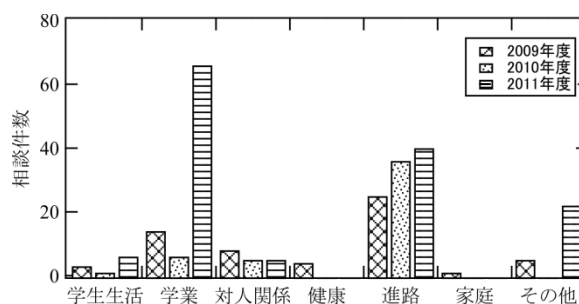


図5 高学年男子の相談内容別件数の推移

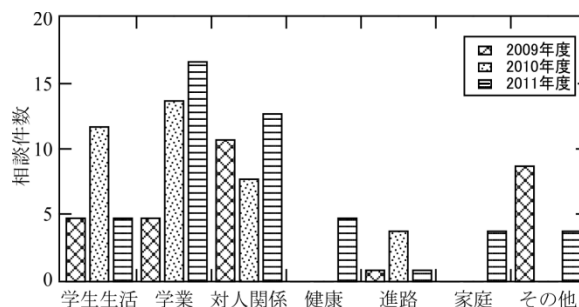


図6 低学年女子の相談内容別件数の推移

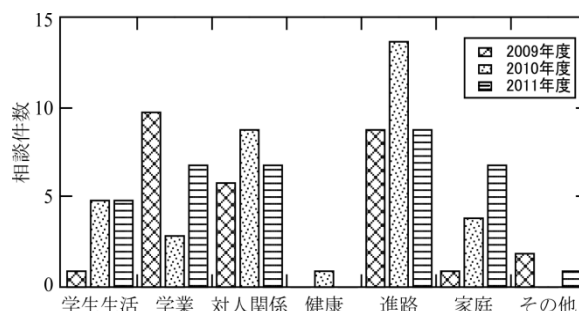


図7 高学年女子の相談内容別件数の推移

でいる学生が多いものと推察できる。さらに家庭に関する相談も高学年女子で多いのも特徴である。すなわち、女子学生は、様々な内容の悩みを

持って日々の学校生活を送っており、女子学生に対するメンタルヘルスの重要性が明らかとなった。

図8に専攻科生の相談内容別件数の推移を示す。図8に示すように専攻科生では、対人関係、家庭に関する相談以外を除いて平均10件程度の相談が認められる。特に進路に関する相談が比較的多い。また、精神的な身体的不調を訴えた相談が2009年度および2010年度に多く見られたため、健康に関する件数が多くなっている。

図9に保護者の相談内容別件数の推移を示す。図9に示すように保護者は、進路およびその他を除いて平均的に約6件程度の相談件数となっている。学生では、進路に関する相談が比較的多いのに対し、保護者では進路に関する相談が少なく、家庭に関する相談が多くなっているのが特徴である。

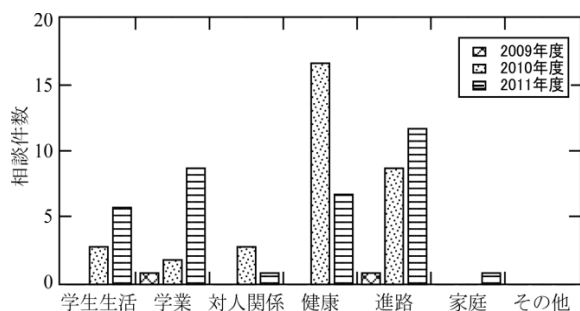


図8 専攻科生の相談内容別件数の推移

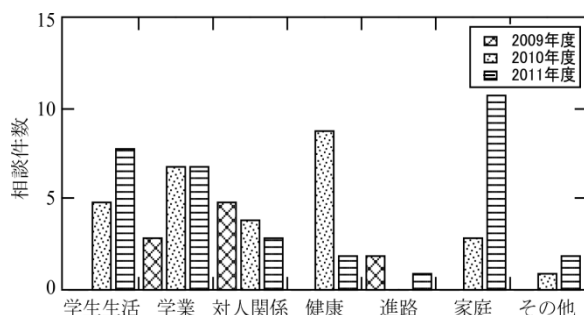


図9 保護者の相談内容別件数の推移

5. まとめ

学生相談室の相談体制をさらに充実させることを目的とし、2009年度から2011年度までの3年間の学生相談室の利用状況についてまとめた。相談件数の年間平均は、約320件であり、女子学生、専攻科生の利用率が高い。相談内容は、学業に関する相談が最も多く、次いで進路、学生生活、対人関係の順番で件数が多い。男女を問わず、低学年では、学業に関する相談が多く、高学年では、進路に関する相談が多い。特に女子学生では、対人関係に関する相談が多い。

これらの特徴を踏まえつつ、多様化・複雑化・深刻化する学生の悩み・苦しみに対応できる学生相談室としての体制づくりを早急に検討する必要がある。そのための具体的取り組みとして、以下の4点が挙げられるであろう。

1. 女子学生の相談を専門とする女性室員の増員
2. 専攻科指導教員との連携強化による問題を抱えた専攻科生の早期発見と迅速な対応
3. 原級生のサポート体制の確立
4. 非常勤カウンセラーの増員

また、これらの取り組みを通して相談体制の充実を図るとともに、健全で充実した学生生活を保障するためには、緊急時への対応についても考えておく必要があると思われる。特に、近年増え続けている自殺未遂及び自殺発生時における対応について、具体的に検討しなければならないと思われる。さらには、県教育センターとの連携や、他高専の学生相談室との情報交換の場として、「対応事例学習会（仮称）」を定期的を開催することも、今後の展開のあり方として検討に値するであろう。

参考文献

- 1) 出淵幹郎, 有道祐子:「若年層に見られる『抑うつ』の特質」, 香川高等専門学校研究紀要, 1, 1-10, 2010.

- 2) 出淵幹郎, 有道祐子：「高松高専における発達障害者特別支援教育を推進するために」, 高松工業高等専門学校研究紀要, 43, 59-72, 2008.
- 3) 出淵幹郎, 有道祐子, 中瀬巳紀生：「高松高専における発達障害者特別支援教育の事例と分析（第1報）」, 高松工業高等専門学校研究紀要, 43, 73-80, 2008.
- 4) 尾崎紀夫, 笠井清登, 加藤忠史, 神庭重信, 功刀浩, 久保千春, 小山司, 白川治, 西田淳志, 野村総一郎, 福田正人, 元村直靖, 山脇成人：「うつ病対策の総合的提言」, 日本生物学的精神医学会誌, 21, 3, 155-182, 2010.
- 5) 川上憲人：「世界のうつ病, 日本のうつ病—疫学研究の現在」, 医学のあゆみ, 219, 13, 25-929, 2010.
- 6) Kessler RC, Angermeyer M, Anthony JC, De Graaf R, Demyttenaere K, Gasquet I, De Girolamo G, Üstün TB: “Lifetime prevalence and age of onset distributions of mental disorders in the world health organization's world mental health survey initiative”, *World Psychiatry*, 6, 3, 168-176, 2007.
- 7) 尾崎紀夫：「遺伝因子と環境因子の統合-うつ病の病態生理解明-」, 精神薬療研究年報, 3, 1-5, 2004.